

国際会議「The Extreme Universe in the Suzaku Era」報告

小山 勝 二

〈京大物理学研究科 〒606-8502 京都市左京区北白川追分町〉

e-mail: koyama@cr.scphys.kyoto-u.ac.jp

国際会議「The Extreme Universe in the Suzaku Era」は12月4-8日にかけて京都テルサで開催され、成功裏に終了した。日本の5番目のX線衛星「すざく」はたいへんな難産だった。誕生後（打ち上げは2005年7月10日）も深刻なトラブルに遭遇し、前途を疑問視する向きもあった。しかし1年5カ月余りで、32編の査読付き論文として発表、またはPublications of the Astronomical Society of Japan (PASJ) 特集号で間もなく発表されるなど、迅速かつ多くの成果を上げるほど元気に育った。朱雀は不死鳥だった。

今年は超新星SN1006の千年紀でもある。SN1006は藤原定家が明月記に貴重な記録を残したのみならず、日本のX線衛星が宇宙線加速の証拠を見つけた記念碑的な存在である。日本の大きな寄与を思えばSN1006に「日本の超新星」と領有権(?)を主張できるかもしれない。

上記国際会議は「すざく」の成果報告と研究の展望、ならびにSN1006千年記念をかねて藤原定家ゆかりの地、京都で開催したものである。

会議運営は「よく組織され、心がこもっていた」とは多くの参加者からの言葉であった。鶴剛氏をはじめとするLOCと京大大学院生諸君の日夜の奮闘のお陰である。発表内容は口頭発表96(うち「すざく」関連40)、ポスター発表240(90)で高エネルギー天文全般に及んでいたが、X線で見える多様な天体を統一的に貫くセッション構成が良かったと思っている。日本が誇る研究戦略といえよう。

参加者は15カ国、398名、内訳は国内機関から215名、海外機関から152名、オンサイト参加31



図1 本会議の口頭発表の一コマ。

名とX線天文の分野では特筆すべき人数であった。5年のブランクを乗り越えて日本がX線天文学において世界の中枢の一角を担い続ける決意を表明できたのではないだろうか。

会議の最中(6日の午後)には記者発表も行った。宇宙航空研究開発機構(JAXA)の希望もあり、東京でも同時に行われた。内容は本会議で報告された「すざく」の成果の中から五つ精選したのだが、記者からは「多すぎて勉強したり、調べたりするのがたいへんだった、今後はもっと減らしてほしい」と嬉しいような、残念なようなクレームを受けた。と言いながらも、記者の皆さんは「久しぶりに面白くて、楽しい記者会見でした」と喜んでくれた。折角の機会だったので、最近の日本における基礎科学軽視の現状にわれわれの意見や心情も訴え、マスメディアからのサポートもお願いした。記者会見の内容は以下のように多くが各メディアで広く紹介された。社会寄与の一端も果たしたと思う。

(1) 天の川中心で300年前大爆発(2紙)



図2 本会議の聴衆の様子.



図3 バンケットの一こま.

- (2) 「すざく」超新星に迫る一明月記にも登場
明るさ史上最高 (NHK, 2紙)
- (3) 銀河の大爆発が作った巨大プラズマの「帽子」(6紙)
- (4) 特集記事 (2社の予定)

本会議と記者発表の全容を詳しく述べるほどに紙面の余裕はないので以下の WWW から想像していただきたい.

<http://www-cr.scphys.kyoto-u.ac.jp/conference/suzaku2006/>

口頭発表は Progress of Theoretical Physics (PTP) の Supplement Series で, またポスター発表は CD

でまとめて公表する予定なので, 興味ある方はそれも読んでいただきたい. われわれ X線グループは今回の会議の成功に満足することなく, 引き続き世界の中核の一角を担うべく努力と研鑽をしたい.

本会議は文科省 21 世紀 COE プログラム「物理学の多様性と普遍性探求拠点 (京大)」, 「究極と統合の新しい基礎科学 (阪大)」, 科学研究費特定領域「ブラックホール天文学の新展開」および財団法人「宇宙科学振興会」からサポートをいただいた. ここに深く感謝する.

組織委員長